

# **Eine Subversive Ansicht zu konventionellen Vorstellungen über das Märchen Schneewittchen**

## **— Eine Interpretation der Grimmschen Märchen aus der Perspektive der Gender Studies —**

Yoshiko Noguchi


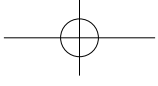
(Mukogawa Frauen-Universität, Nishinomiya, Japan)

Das Märchen *Schneewittchen* ist eines der bekanntesten Märchen der Brüder Grimm. Vielen ist es aber nicht im Originaltext bekannt, sondern in der veränderten Version von Walt Disney. In diesem Aufsatz wird zuerst versucht, den Unterschied der beiden Texte aufzuzeigen und dadurch die Botschaft der beiden Texte aus der Perspektive der Gender Studies zu analysieren. Danach werden die Veränderungen, die die Brüder Grimm in weiteren Fassungen vorgenommen haben, schließlich untersucht, ob sie auf den Wertvorstellungen des Mittelalters oder auf denen der Neuzeit beruhen.

Die Unterschiede der Texte von Disney und den Brüdern Grimm sind folgende: Disney hat eine Lösung durch Liebe erfunden, die Rollenverteilung zwischen beiden Geschlechtern hinzugefügt und die Racheszene von Schneewittchen zu einer Gottesstrafe durch einen Donnerschlag verändert. Alle diese Änderungen wurden aus einer geschlechtsspezifischen Perspektive in der Neuzeit vorgenommen.

Wenn man die Art und Weise, wie die Brüder Grimm den Text verändert haben, im Vergleich mit den späteren Fassungen analysiert, ergeben sich in der letzten Fassung zwei Merkmale, nämlich das Festhalten an den Wertvorstellungen des Mittelalters und das Beifügen von modernen Wertvorstellungen. Konkrete Beispiele für die modernen Änderungen sind folgende: Statt der Mutter tritt die Stiefmutter auf. Das Wort „Engelland“, das nicht England sondern die Hölle bedeutet, wurde in „Land“ umgeändert. In der Rolle des Erlösers wurde der eigene Vater Schneewittchens durch einen Königssohn ausgetauscht. Die Methode, mit der Schneewittchen wieder ins Leben zurückgebracht wurde, ist von der Magie des Arztes zum Schlagen oder Schütteln durch das Gefolge verändert worden. All diese Veränderungen sind moderne Änderungen, die den Wertvorstellungen der Bürgerschicht angepasst sind. Konkrete Beispiele für die mittelalterlichen Änderungen sind folgende: Die Art und Weise der Lösung ist nicht die Liebe, sondern die Initiation. Die Rollenverteilung zwischen Mann und Frau wird nicht beigebracht. Die Racheszene Schneewittchens ist beibehalten. Das häufige Auftreten der Zahl „Sieben“ deutet die Verbindung zu der Magie und der Unterwelt an.

Das Märchen *Schneewittchen* ist keine Erzählung einer eifersüchtigen Königin, deren Schönheit mit den Worten des Spiegels vernichtet wurde und die ihre Stieftochter ermorden ließ. Eine andere Auffassung wäre möglich, wenn man an die Bedeutung der Schönheit in den Wertvorstellungen des Mittelalters denkt. Das Wort „schön“ wurde im Mittelalter im Sinne von „fruchtbar“ verwendet. Schön zu sein, war gleichbedeutend mit fruchtbar zu sein. Dieses Märchen, in dem die magische Zahl „Sieben“ häufig



vorkommt, ist die Erzählung des Engellandes, der Hölle oder des Heidentums, wo die kultische Verehrung von Diana als Göttin des Waldes anzunehmen ist. Durch die Antwort des Spiegels (Dianas) erkannte die Königin die Gefahr, dass der Vater an der Tochter einen Inzest begehen wird, weil das Tabu des Inzestes erst im 16. Jahrhundert verallgemeinert worden ist. Die Mutter hat die Tochter im Wald freigelassen, um sie vor einem Zugriff des Vaters zu befreien. Das Märchen wurde aus der geschlechtsspezifischen Perspektive des Mittelalters erzählt, in der eine unfruchtbare Frau als böse galt. Es kann sich also um eine Erzählung des Königs handeln, der eine unfruchtbare Frau mit der Hilfe des Spiegels tadeln wollte

# 白雪姫の固定観念を覆す

## — グリム童話のジェンダー学的解釈 —

野口芳子  
(武庫川女子大学)

### 1. 序論

白雪姫はシンデレラと並んで日本で最もよく知られている童話（昔話）であるが、たいていの場合、その話はグリム童話の原文の内容ではなく、ディズニー版の内容と思われる。なぜなら、子供用のアニメや絵本に紹介されているのは、ディズニー版のものが圧倒的に多いからだ。

グリム童話とはグリム兄弟が自分の想像力で作り上げた創作童話ではなく、かれらが収集した昔話（Märchen）<sup>1)</sup>を収録したものだ。正式な題名は『グリム兄弟によって収集された一子どもと家庭のメルヒェン集』（Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm）という。初版が出版されたのは1812年（第1巻）と1815年（第2巻）、第2版が1819年、第3版が1837年、第4版が1840年、第5版が1843年、第6版が1850年、第7版（決定版）が1857年である。手書き原稿である初稿（1810年）を入れると、グリム童話集のテキストは8種類存在する。

グリム兄弟は原稿執筆後、48年にわたってメルヒェン集に手を加え続けた。各版のテキストを比較してみると、改変箇所には「近代化」された面と「中世化」された面が併存していることがわかる。つまり、グリム兄弟はメルヒェン集を普及させるため、読者であるピュルガー（都市富裕市民）の価値観に合うよう近代化したが、同時にメルヒェンを昔の調和に満ちた時代に民族全体の中からあふれ出た自然文学（Naturpoesie）であると捉えていたので<sup>2)</sup>、「中世化」をことさらに強調する必要があったのだ。ようするに、グリム童話のなかには、グリム兄弟が生きていた近代という時代の価値観と、ドイツ民族が1つの国に所属していた神聖ローマ帝国時代<sup>3)</sup>の中世の価値観が交錯しているのである。

この論文では、まず、グリム童話決定版 KHM53「白雪姫」とディズニー版「白雪姫」の相違を明らかにし、それが伝えるメッセージの相違についてジェンダーの視点から考察していく。次に、グリム兄弟による書き変えに目を向けながら、伝承文学であるメルヒェンが持つ様々なメタファーを解明することによって、「白雪姫」に含まれている中世や近代の価値観を検証していく。それによって、女性や男性に求められる社会的期待「ジェンダー」が時代によって社会によって異なるということを明らかにしたうえで、異なるジェンダーに視座を据えた新解釈を提示していく。

## 2. ディズニー童話とグリム童話の「白雪姫」の概観と相違

### 1) ディズニー版「白雪姫」のあらすじ

継母の後に酷使されている白雪姫は、水を汲みに行ったとき王子に出会い恋をする。魔法の鏡に「白雪姫が世界で1番美しい」と言われて激怒した後は、狩人に白雪姫を森で殺し、証拠に心臓を持ち帰るよう命じる。狩人は可愛い姫を殺せず逃がしてやる。7人の小人の家に迷い込んだ姫は、散らかっている小人の部屋を掃除し、料理や洗濯をする。鏡の答えから白雪姫が生きており、森の小人の家にいることを知った後は毒林檎を作り、姫殺害を企む。姫は赤い林檎を食べて死ぬ。小人は姫をガラスの棺に入れて葬式をする。隣の国の王子が通りかかり、棺の中の姫の美しさに心を奪われ姫にキスする。そのとたん姫が生き返る。小人に追いかけられた後は岩の上で雷に打たれて即死する。白雪姫は王子と結婚して幸せに暮らす<sup>4)</sup>。

### 2) グリム童話決定版 KHM53「白雪姫」のあらすじ

実母は白雪姫を産むと同時に亡くなり、白雪姫は美しく高慢な継母に育てられる。継母は不思議な鏡に国中で1番美しいのは誰かと聞く。いつもは后だと答える鏡が白雪姫と答えたので激怒した後は、狩人に白雪姫を森で殺し、肺と肝を持ち帰るよう命じる。狩人が姫を殺そうとすると、かわいい姫は泣いて命乞いする。狩人は姫を逃がしてやり、代わりに猪の肺と肝を後に渡す。后はそれを塩ゆでにして食べ、白雪姫の肺と肝を食べたと思ひこむ。一方、白雪姫は森で小人の家を見つけて中に入る。家は奇麗に片付いていて、食事の準備もできている。空腹だった姫は小人の食事をつまみ食いし、ベッドで眠り込む。帰宅した7人の小人は姫を発見して驚くが、あまりに可愛いので7種類の家事をすることを条件に家に置いてやる。鏡の答えから白雪姫が生きていることを知った後は、物売りの老婆に変装して姫に紐を売りつけ、きつく締めて殺す。倒れた姫を発見した小人が、紐を緩めると姫は生き返る。2度目は老婆に毒の櫛を髪にさされて姫は倒れるが、小人が櫛を抜くと甦る。3度目は老婆に毒の林檎をかじらされ、姫は死んでしまう。小人はガラスの棺に姫を入れて山の上に安置する。道に迷った王子が棺を見て、譲ってくれるよう小人に頼む。運ぶときに家来が躓いて棺が揺れると、林檎が喉から飛び出し、白雪姫が生き返る。王子は喜んで白雪姫に求婚する。結婚式には后も招待され、焼けた鉄の靴を履かされて死ぬまで踊らされる<sup>5)</sup>。

### 3) ディズニー版とグリム版（決定版）「白雪姫」の相違について

#### (1) 恋愛の有無

ディズニーの白雪姫は姫が水汲みに行ったとき、偶然王子に出会い、2人は恋をするという設定になっている。毒の林檎を老婆から買って食べるのも、老婆が「願いがかなう林檎」であることを強調したので、姫は王子に会えることを願って食べる。死んでから王子のキスで甦った姫は、林檎が願をかなえてくれたと思う<sup>6)</sup>。この林檎は毒入りではあるが、王子のキスで甦るとい魔法がかけられていたとすると、王子以外の男性から姫を守る役割を果たしていたことになる。そこには魔法の魔術を打ち負かすことができるのは「愛する人のキス」、「愛の力」だけであるというメッセージが込められている。だが、そのような林檎を作った後は魔法だと断言されている。

人に害を及ぼす害悪魔術ではなく益をもたらす有益魔術をかけたのだから、后は魔女ではなく賢女に値する<sup>7)</sup>。なぜなら、恋する2人を結びつけたのは、愛の呪縛がかけられた後の毒林檎に他ならなかったからだ。

グリム童話の場合、白雪姫は生前に王子に出会うことはなく、死後棺桶に入ってから初めて出会う。したがってこの王子は生きた女性ではなく、死んだ女性に興味を持ち惚れ込んだことになる。さらに姫が目覚めたときに出会う王子は、恋人ではなく初対面の人だ。そのうえ姫が目覚めたのは、愛しい王子がキスしたからではなく、家来が躓いて棺を揺らしたからだ。揺れた拍子に姫の口から林檎が飛び出し、姫が生き返ったのだ。王子は喜んで直ぐ姫に求婚し、姫も喜んで受諾する。しかしそれは、2人が恋人同士だったからではなく、どちらも王家出身で身分や家柄が釣り合った者同士だったからであろう。なぜなら外観に対する好みを前面に出して結婚相手を決めるのは、西洋中世の王家では不可能であったからだ。中世では結婚は法行為であり、家の存続のため子孫の確保と財力の強化を期待して行われ<sup>8)</sup>、愛情の有無が重視されることはなかった。そこで棺の上に書かれた「王家の姫」というメッセージが重要な意味を持つことになる。白雪姫の美しさが、王子に求婚を決意させたのだという解釈も不可能ではないが、王子が姫に魅かれたのは、死体のときであった。死んだ女性の美しさに魅かれるのと、生きた女性の美しさに魅かれるのとでは訳が違う。物言わぬ死体と、人格が反映された生体とでは、美しさに対する定義が異なる。生存中の白雪姫の美しさに心を奪われたのならまだしも、この場合はそうではない。

結婚式に関する描写は、王子と姫の豪華な衣装や愛情確認の儀式であるべきなのに、ここでは継母である后を罰する報復行為に終始する。つまり、グリム童話には結婚は恋愛によってするものであるという近代の価値観ではなく、不当な扱いを受けた者は報復しなければ相手の行動を正当だと認めたことになるという中世の価値観が前面に出されているのだ。

## (2) 性別役割分担の有無

ディズニーでは小人の家は散らかっていて、白雪姫が片づけて掃除をして清潔な部屋にするが、グリム童話では小人の家は「すべてが小さかったが、言葉で表現できないほど愛らしく、きれいに片付いていた」<sup>9)</sup>、とされている。山で鉱物掘りを仕事とするドイツの小人(Zwerg)は、男性であるが抜群の家事能力を持つ。外で労働するのは男性、家で家事をするのは女性という性別役割分担が前面に出されているディズニー版に対して、グリム版では男性である小人の優れた家事能力が描き出されている。ドイツの小人には卓越した家事能力を持つ者がいる。ケルンのハインツェルメンヒェン(Heinzelmannchen)という小人は夜寝ている間に家事をしてくれる存在で、家の精(Kobold)とされている<sup>10)</sup>。

男は外で生産活動に携わり、女は家の中で家事をするという性別役割分担は、近代が生み出した概念である。産業革命と鉄道の普及によって、これまでの職住一致の家庭を通勤により職住分離の家庭に変えたのである。これにより家庭は生産の場から消費の場へと変化し、男女の性別役割分担が定着する<sup>11)</sup>。夫は外で働き、妻は専業主婦として家庭を守る、いわゆる近代家族が誕生したのだ。ドイツではビュルガー(都市富裕市民)の女性が公的生活で禁治産化していくと同時に、家庭の内的領域の情緒化が顕著になる。いわゆるビーダーマイヤー期(1815-1848)の誕生である。「結婚は精神的感情的に結ばれた共同体であり、家族は人を社会的文化的存在へと教育

する場である」という発想は<sup>12)</sup>、ピーターマイヤー期の所産である。結婚や家庭生活の中で感情や愛情の価値が、「かつてなかったほど高く評価され」<sup>13)</sup>、恋愛結婚が称揚され、母性愛や父性愛、家族愛が自明の理であるかのごとく捉えられていく。女性にはかつてのように生産能力ではなく、再生産を支える能力（家族の世話や子供を教育する能力）が求められるようになる。生産力のある人間が「男らしく」、再生産力のある人間が「女らしい」、換言すると、労働能力がある男性が「男らしく」、家事能力がある女性が「女らしい」ということになり、近代社会が要求する性別役割分担に適合した男性像と女性像が創出されていく。ディズニー版には明確に現れている近代の性別役割分担は、グリム童話にはさほど明確には現れていない。つまり、近代のジェンダー観に染まっているディズニー版に対して、グリム版には近代以前のジェンダー観が残存しているのである。

### (3) 継母に対する白雪姫の制裁の有無

ディズニーでは白雪姫は継母に殺されるが、復讐したりしない。近代が女性に求める「優しさと美しさ」という美德を持つ白雪姫は、「女らしさ」を損なうような行為はせず、あくまで近代の「理想の女」として振舞う。一方、グリム童話では白雪姫は自分を殺した継母を結婚式に招待して、真っ赤に焼けた鉄の靴を履かせて死ぬまで踊らせる。これは「真っ赤に焼けた鉄による判定を信じるゲルマン信仰を暗に示している。なぜなら、この鉄は正しい人、まったく罪のない人だけが危険な目に合わずに触れることができるからである」とヴィルヘルム・グリムは2版の序文に書いている<sup>14)</sup>。中世では火審、水審などの神明裁判で真偽が判断され、焼けた鉄による審査は火審に相当する<sup>15)</sup>。もし、継母が無罪なら火は害を与えず、有罪であれば害を与えると信じられていたのだ。グリム版では姫は結婚式という公の場で継母を火審にかけ神の判断を仰ぐ。なぜなら中世では危害を加えられた者がフェーデ（組織的な復讐）を行わない場合、相手の行動を正当だと認めたことになるからである<sup>16)</sup>。一方、近代社会ではこのような残酷な行為は女性に相応しくないとされる。そこでディズニーでは後は小人に追いかけられ、岩の上で雷に打たれて即死するという筋書きに変更される。白雪姫の復讐はメルヒェンから削除され、天罰という神の意志による制裁に変えられたのである。

## 3. グリム兄弟による版による書き換えについて

### 1) グリム童話の8種類のテキストについての概観

グリム童話「白雪姫」には8種類のテキストが存在する。手書き原稿である初稿（1810）、初版（1812）、2版（1819）、3版（1837）、4版（1840）、5版（1843）、6版（1850）、7版（1857決定版）である。白雪姫の話は初稿では43番目に置かれ、「白雪姫」に「不幸な子ども」という副題がつけられており、ヤーコプ・グリムが1808年にマリー・ハッセンブフルークから聞いた話を書き取ったものであろうと推測されている<sup>17)</sup>。初版では53番目に置かれ、ヴィルヘルム・グリムによってフェルディナント・ジーベルトが送ってきた異型（Variant）との混成が行われた<sup>18)</sup>。その後、53番の位置は決定版まで変更されていない。1810年の初稿（46話）から1857年の決定版（211話）出版まで、グリム兄弟は48年間にわたってメルヒェンに手を加え続けた。



どのように書き変えていったのか、その手法を「白雪姫」を中心に検討していく。

## 2) 実母から継母への変更。

初稿(1810)と初版(1812)では実の母親である后が、2版(1819)から継母に変えられる。ヴィルヘルム・グリムがハインリッヒ・レオポルト・シュタインから送られた異型(Variant)との混成を行ったからである。それに伴って後の行動も変更される。

初稿の后は窓際に座って「雪のように白く、血のように赤い頬で、窓枠のように黒い瞳の子どもがほしい」と願い、その通りの美しい娘を授かる。鏡に「鏡や壁の鏡、エンゲルランド<sup>19)</sup>で一番美しい女は誰」と聞くと、鏡は「后は美しいが、白雪姫は10万倍美しい」と答える。それを聞いて后は我慢できなくなる。なぜなら、彼女は国中で最も美しい女でありたかったからだ。そこで王が戦争に出かけている間に、后は白雪姫を馬車に乗せて森の奥深くに行き、赤いバラが咲いているところで馬車を止め、姫を降して花を摘んできてくれと言う。姫が降りる否や馬車を出発させ、姫を置き去りにする。野生の獣が姫を食い殺すと思ったからだ<sup>20)</sup>。

初稿の実母は白雪姫の美しさに嫉妬し、自ら白雪姫を連れだして森に捨てる。彼女は娘を捨てはしたが、家来に殺すよう命じたわけでも、自ら殺したわけでもない。初版の母親は同様に実母ではあるが、残酷さが初稿とは異なる。「雪のように白く、血のように赤く、黒檀のように黒い」娘を授かった后は、白雪姫が7歳になった時、「鏡や壁の鏡、国中で1番美しい女は誰」と鏡に聞く。「后、ここではあなたが美しいが、白雪姫はあなたより千倍も美しい」と鏡が答えたので、后は嫉妬で真っ青になり、狩人を呼び出し、白雪姫を森の奥で殺し、証拠に肺と肝臓を持って帰るよう命じる。后はそれを塩茹でにして食べるのだという<sup>21)</sup>。

実母である后が実の娘を殺させて、娘の肺と肝臓を食べるといふのだ。森に置き去りにする実母から、はるかに残酷な実母に改変されている。これは一体、何を意味するのだろうか。グリム童話で、一見訳が分からないような改変が行われている箇所は、古代化か中世化が行われた結果である場合が多い。この場合もグリム兄弟が原始の「人食いの風習」(Kannibalismus)という民間信仰(臓器を食べるとその人の美や能力を獲得できる)を偲ばせる要素を挿入することによって<sup>22)</sup>、メルヒェンの古代性を強調しようとしたのだ。この改変は7版の決定版(1857)まで踏襲されるが、2版以降の版では実母が継母に変えられる。これによって実の母が実の娘を殺したり、食べたりするのではなく、血縁関係のない継母が継子の臓器を食べるといふ話に変更される。

現代の読者には、美しさを求めて嫉妬する后は愚かな存在であるかのように受け取られる。しかし、中世の女性が果たしてここまで美しさを追求したのだろうか。女性に美の価値が規範として押し付けられたのは、産業革命にともなって、女性が労働から疎外されてからである。機械化され、工場化された生産の場では、産む性としての女性は、定時労働には不向きな存在となり、男性に比べて役に立たない存在となると同時に美的存在となっていった<sup>23)</sup>。結婚の条件に女性の美が求められるようになったのは、近代以降のことである。中世では結婚は法行為であり、家の存続のため子孫の確保と財力の強化を期待して行われた<sup>24)</sup>。愛情の有無が重視されることはなかったのだ。妻にする女性にまず求められるのは、家柄と財産と出産能力であり、美しさではなかった。美しさは恋愛においては重視されたが、それは結婚に結びつくものではなかった。恋と結婚は結びつかないものとされ、娘をいかに恋愛から遠ざけ、うまく結婚させるかが親の関心事項で

あった<sup>25)</sup>。西洋中世では「美」とは「豊かさ」を示すものであった<sup>26)</sup>。豊かな女性には、財力や家柄や地位があるだけでなく、豊穰であること、つまり「出産能力がある」ことが求められた。白雪姫の後は娘を1人しか産まず、男性の後継者を産んでいない。王家にとってこれはかなり危険な状態である。出産能力に関しては、年配の後より若い白雪姫の方が優れている。「白雪姫が后より千倍も美しい」という鏡の答えはそのことを暗示しているのであろう。

豊かさを失いつつあり、地位を追われる危険に晒されている后にとって、白雪姫の存在は疎ましいものを感じられる。それは実の娘であっても継娘であっても同じだろう。しかし、グリム兄弟は娘に危害を加える母親を継母という表現に書き換える。弟のヴィルヘルム・グリムによる変更であるが、おそらく彼は、実の母親についての悪いイメージを与えるのは子どもにとってもよくないと考えたのであろう。また、購買者が母親であることを考えると、自分の悪口を書かれている本の購入は控えるだろう。初版の売れ行きが芳しくなかったため、再版を出すにはグリム兄弟は出版社や購買者の意向に迎合した改筆を断行しなければならなかったのだ。

### 3) 7の数字の出現に対する変更

白雪姫の話では7の数字が頻出する。初稿では7 (sieben) は14回 (同じものを除くと9回) 出現するが、初版では18回 (14回)<sup>27)</sup> に増え、更に2版では26回 (14回) になり、決定版では30回 (14回) に増える。これはグリム兄弟が意図的に増やしたと思われる。7人の小人の持ち物は、初稿では (皿、スプーン、ナイフ、フォーク、コップ、ベッド) の6種類だったのが、初版以降の版ではランプが挿入されて7種類にされる。后が鏡にする質問の回数は初稿では1回なのに、初版以降では7回に増やされている。また小人の家があるところは初版以降では7つの山を越えたところとされている。初版から決定版まで出現する7は14種類で同じだが、後の版になるほど小人や山に対する呼びかけに繰り返し7をつける傾向がみられる。

「黄泉の世界の存在でもある」 (sie heissen auch die Unterirdischen)<sup>28)</sup> 7人の小人の住処を7つの山を越えた森の奥としたことや、後の嫉妬を呼び起こす鏡への質問回数を7回に増やしたのは、7が占星術や魔術や異界と結び付いた不吉な数だということをグリム兄弟が認識していたからであろう<sup>29)</sup>。白雪姫の年齢は初稿では示されていないが、初版以降では7歳とされている。青年期に向かう年齢としてイニシエーションの対象とされていた歳だ。西洋中世では保護を必要とするのは7歳までとされていた<sup>30)</sup>。1794年のプロイセン一般ラント法は7歳までが子ども、14歳までが後見を必要とする年齢と定めている<sup>31)</sup>。7と7の倍数は法的に重要な数として認識されていたのだ。7歳が過ぎると子ども期を修了するので、修了に値するかどうか確認する必要がある。そのため7歳の子に試練が課されるのだ。永久歯が生えて幼児期を脱する年齢である7歳は<sup>32)</sup>、最初の通過儀礼 (Initiation) が子どもに課される時期だったのである。幼児期を脱した白雪姫は、危険な青年期に向かう前に、母親によって森に追放され、通過儀礼に晒されたという解釈も成り立つ。7歳の娘が送られた先は、通過儀礼が課される場所である森の奥深く (7つの山を越えたところ) で、異界の存在である7人の小人が住む家である。家事能力抜群の小人の下で修業し、何もできない子どもの白雪姫は7つの家事をこなせる娘として成長していく。子どもから娘になるには、これまでの自分を殺して、新しい自分に生まれ変わる必要がある。仮死状態を体験してこそ、子どもは大人になることができると信じるからこそ、近代以前の社会ではイニシエーション



ンが課されたのだ。

数秘学によると、7は「最も神秘的で魔術的な数」で、「宗教と魔術に頻出する」、「唯一無比」の数だという<sup>33)</sup>。太陽の7番目の惑星と信じられていた月と関連があり、「7日ごとに4つの相を持つ月は、原始信仰ではその満ち欠けによって人生の盛衰を支配すると考えられた」<sup>34)</sup>。月の周期は月経をもつ女性のバイオリズムとも関係している。昔の女性は7歳で子ども期を脱し、14歳で初潮を迎え、49歳で更年期を迎え、70歳で死亡すると考えると<sup>35)</sup>、7の倍数年は女性の人生の転換期を示していたことになる。月の女神であるディアナ信仰は穀物や女性の実りと密接に結びついた信仰として農民の間に広く浸透していた。グリム童話のなかの7の数字が通過儀礼と結びついているのも、ディアナ信仰の名残かもしれない。7が続出する「白雪姫」の話は、父性宗教のキリスト教ではなく、それ以前の母性（豊穡）宗教であるディアナ信仰と結びついた話とも考えられる。

#### 4) 天使の国（Engelland）から国（Land）への変更

初稿では后が鏡に問いかける言葉は、「鏡よ、壁の鏡、エンゲルラント（Engelland）で一番美しいのは誰」である。初版以降は単なる「国（Land）」に変更されるが、最初の原稿（初稿）では「天使の国（Engelland）」だったのだ。ドイツの百科事典では Engelland は England のこととされている<sup>36)</sup>。グリム兄弟の『ドイツ語辞典』にも Engelland は England の昔の表記法だと書かれている<sup>37)</sup>。それではこの話はイギリスでの話なのだろうか。Engelland にはイギリスという意味と「天使の国」と言う意味がある。天国は「神の国」であるので、天使が作る国とは「墮天使の国」を意味することになる。神が地上に天使を遣わされたとき、天使たちは誘惑に負けて人間の娘たちと交わり息子を産ませるに至った。そのため墮天使は天国から追放され、悪魔に仕えるデーモンとなった。それら墮落した天使たちが住む国が「天使の国」つまり「地獄」なのである（創世記第6章1-4に関するラクタンティウスの解釈<sup>38)</sup>。つまり「天使の国」とは墮天使ルシファーが支配する国、地獄、異端者や異教徒たちの国を指すことになる。

16世紀初期の魔女裁判で数人が、南チロルの「オーバーヴェール出身の被告人アンナ・ヨブステインがエンゲルラントの女王に選ばれ、エンゲルラントの王である悪魔と豪者に飾り立てて結婚した」と証言しているところをみると<sup>39)</sup>、エンゲルラントが地獄だということ認識は魔女狩りを経験した民の間で共有されていたようだ。エンゲルラントは古い綴りの英国ではなく、文字通り「天使の国」、「墮天使の国」、「地獄」を指す言葉と考えてよいとフリッツ・ビロフは主張している<sup>40)</sup>。

白雪姫の話が「墮天使の国」の話であるとする、キリスト教徒から見ると地獄に行く人々、すなわち異端者や異教徒たちの国の話ということになる。キリスト教道徳や一夫一婦制がゆきわたっていない国における王にとって、女の子1人しか産まない後の美しさ（豊穡）は限定的で、若さを誇る娘がより美しい（豊穡な）存在に見えたのであろう。鏡は「月と関連し、女性の誇りを表す」という<sup>41)</sup>。鏡の言葉を盲信する后にとって、鏡は「神」そのものといえる。后が崇拝していたのは、キリスト教が悪魔視する豊穡の女神、月の女神であるディアナではないのか。なぜなら「中世初期においても農村の住民が森や耕地の女神としてディアナを崇拝したことは十分ありえる」からであり<sup>42)</sup>、そのことが伝承文学の中に保持されていると考えられるからである<sup>43)</sup>。

## 5) 白雪姫を甦らせる人物と方法の変更

毒の林檎を食べて死んでしまった白雪姫を甦らせるのは、初稿では実の父である王であるのに、初版ではどこかの国の王子に変えられ、その変更が決定版まで踏襲される。姫の甦りを伝える初稿のテキストは下記のとおりである。

「ある日、白雪姫の父親である王が自国に戻ってきて、7人の小人が住む森を通過しなければならなかった。棺とその上に書かれた碑銘を見て、王は愛する娘の死を知り、非常に悲しんだ。しかし、王は経験豊かな医者を随行員として連れていたので、小人に死体を譲ってくれるよう頼み、棺をもらいうけた。お抱えの医者が部屋の四隅に縄を結び付けると、姫は再び息を吹き返し、棺から飛び出した。白雪姫は父王と一緒に家に帰る。そしてある美しい王子と結婚する。結婚式には1足の靴が火にかけられ、後はそれを履いて死ぬまで踊らなければならなかった」(初稿)<sup>44)</sup>。

ここでは死んだ姫を見つけるのは実の父であり、甦らせるのは父王の家来である医者だ。しかしこの医者は医术ではなく、魔術で姫を甦らせる。四隅に縄を張って結界を作り、害悪魔術を遮断する対抗魔術で林檎の毒を遠ざけたのだ。魔術師を医師として抱えている王自身も、おそらく魔術に親しんでいる人間であろう。

姫が甦る同じ場面の初版テキストは下記のとおりである。

「あるとき、若い王子が泊めてもらうおうと、小人の家にやってきた。部屋に入り、7つの光にくっきりと照らされて白雪姫がガラスの棺に横たわっているのを見たとき、王子はその美しさに魅せられ、いくら見ても見あきることがなかった。金文字で書かれた碑文を読み、彼女が王女であることがわかった。そこで王子は小人たちに死んだ白雪姫を棺ごと売ってほしいと頼んだ。しかし小人たちはどんなに金を積んでもだめだと言った。そこで王子は棺を譲ってくれ、白雪姫を見ることなしに生きていくことはできない、この世で最も愛しい存在として敬い大切にすることを言った。すると小人たちは王子に同情して、棺を王子に譲ってやった。王子は棺を城に運ばせ、自分の部屋に置かせた。…あるとき家来の1人が棺を開けて、白雪姫を高く持ちあげた。『死んだ娘ひとりでのせいで、おれたちは1日中ひどい目にあっている』と言い、白雪姫の背中をドンと殴った。すると白雪姫が呑み込んだ恐ろしい林檎の芯が喉から飛び出し、白雪姫は生き返った。そこで白雪姫は王子のところに行った。王子は愛しい白雪姫が生き返ったので、嬉しさのあまりどうしたらいいかわからなかった」<sup>45)</sup>。

この後、結婚式が行われ、白雪姫の母親(后)も招待される。彼女は真っ赤に焼けた鉄の靴を履かされ、死ぬまで踊らされる。姫を救済するのが父王から若い王子変えられるが、愛の力で姫を目覚めさせたのではなく、家来の予想外の行動が姫を目覚めさせたのだ。乱暴で予測不能な行動が幸せをもたらすのは、メルヒェンの常套手段だ。蛙を壁に投げつけたり(KHM1「蛙の王様」、援助者である狐を撃ち殺して頭と足を切り取ったり(KHM57「黄金の鳥」)することが、幸せを獲得する行為とされているからだ。しかし、これらの話と異なる点は、ここでは主人公でも救済者でもない脇役の家来が主人の変質狂的趣味(死体フェチ)の片棒を担ぐことを拒否し、姫を棺から出し、高く持ち上げて背中を叩いたことだ。そのような行為が姫を甦らせることができるなど予測不能だ。荒唐無稽なこの救済方法は、メルヒェン的是ではあるがロマンチックではない。近代の愛による救済とは無縁の世界がここには存在する。おそらく、近代以前の社会で大人になる

前に課されたイニシエーションを反映したものであろう。

A. v. ジェネップによるとコンゴやギニアの部族には「イニシエートされるものは以前の環境から分離される（森の中にはこびこみ、そこに隔離すること、祓い式、笞打ち、知覚を失うまで、椰子酒を飲ませて酔わせること）。彼は以前の環境にとっては『死んだ』ものとされ、新たな環境へと合体させられる」のだそうだ<sup>46)</sup>。またイニシエーションの際に背中をユッカの枝で打つ「笞打ちの行為」が分離儀礼の意味と合体儀礼の意味をもつのだという<sup>47)</sup>。「殴打の清め」という打撲の慣習は西洋でも古代から存在し、結婚式で花嫁や花婿が招待客から白樺の木の手で打たれる打撲の風習は多くの地域に存在した<sup>48)</sup>。笞による殴打の力が「生命と生産力を呼び起こす」と信じられていたのだ<sup>49)</sup>。

白雪姫が背中を叩かれて目覚めたのは、イニシエーションの儀式を暗示しているのではないだろうか。そうなるとこの話はまったく異なるメッセージを持つ話になる。初稿では四隅に縄を張る魔術で甦り、初版では背中への殴打で甦る白雪姫は、大人になるための資格を問う試練であるイニシエーションの儀式を受けるために、仮死状態にあったことになる。なぜなら、魔術や殴打による再生はイニシエーションの常套手段であるからだ<sup>50)</sup>。

2版以降の版では家来たちによって目覚めさせられるのは同じだが、殴打によるのではなく、「藪に足を取られて棺が揺れた」ことによるという表現に変えられる。初版のテキストは前近代のイニシエーションを偲ばせる興味深い表現ではあるが、家来が姫の死体を持ち上げて背中を叩くという行為は、主従間の行為を逸脱したものであり、家父長制を取る国家や家族にとって望ましいものではないと判断されたのであろう。おそらくグリム兄弟は再版の意向を斟酌したのだろう。しかし殴打ではなく、揺さぶりによって目覚めさせるという行為も予測外の行為（驚愕による悪霊払い）であり、イニシエーションとの関連を仄めかすものであると考えられる。

#### 4. まとめ—変更点を見据えたジェンダー学的新解釈

ディズニー版が決定版グリム童話と異なる点は、愛による救済を演出したこと、性別役割分担を挿入したこと、姫の後への復讐を天罰（雷）による制裁に変更したことである。これらの変更はすべて近代のジェンダー観に基づいて行われたものといえる。

グリム兄弟の書き換えの手法を版による比較から探ると、決定版の話は中世の価値観を保持している部分と、曖昧にされ近代化された部分があることがわかる。保持している部分は、救済方法が愛ではなく、イニシエーションを仄めかせる方法であること、性別役割分担を挿入していないこと、姫の後に対する復讐のプロットを保持していること、7の数字の頻出によって魔術や異界との結びつきを暗示させていることなどである。曖昧にされ近代化された部分は、実母を継母にしたこと、話の舞台を「天使の国」から「国」に変えたこと、救済者を父王から王子に変更したこと、蘇らせる方法を医者から家来の殴打や揺さぶりに変更したことが挙げられる。これらの改変は近親婚を仄めかす表現を避けて、ピュルガーの道徳観に適合させようとした近代的改変といえる。以上の点を踏まえて、この話を初稿に重点を置いて読み直すと、次のような解釈が可能となる。

1番美しい女性であることを否定されて嫉妬に狂う后が、自分より美しい娘を殺害させるとい

う「白雪姫」の話は、美という概念が時代によって異なるものであり、その意味が異なるということ念頭に置くと、別のストーリーが見えてくる。中世における美とは「豊かさ」を表すもの、すなわち財力や地位だけでなく女性の豊穡、出産能力を意味するものであった。顔や容姿の端麗さを指す近代の「美しさ」ではなく、「豊かな実り」をもたらす女性であることを願った后が、自らの地位や命を守るため考え抜いた末、娘を成人するまで森に隔離する（初稿の白雪姫は年齢不詳だが、后が脅威を感じたとすれば、7の倍数である14歳、初潮が始まる年齢だったのかもしれない）。なぜなら、この国はキリスト教徒から見た地獄、「墮天使の国」<sup>51)</sup>、異教の女神信仰を保持する異教徒の国であるからだ。おそらく父性宗教であるキリスト教信仰ではなく、キリスト教以前の豊穡神であり「三相一体（月、母、狩猟）」の女神であるディアナ（アルテミス）信仰が支配している国であろう。

月は7の周期でその姿を変え、太陰暦は7の倍数で成り立っている。また、サタンは7つの頭を持つ竜として絵画に描かれている。西洋絵画では悪魔が竜の姿で描かれる場合が多い。ルネッサンスの画家ラファエロは黙示録に登場する竜（悪魔）と闘う「聖ミカエル」や「聖ゲオルギウス」の絵（1503-05）を描いているし<sup>52)</sup>、頭を7つ持つ竜はドイツのアルプレヒト・デューラーが木版画集『黙示録』（1497-98）で詳細に描いている<sup>53)</sup>。7つの頭を持つ竜がサタンであり、墮天使シファーであるという記述は聖書の黙示録にも存在する<sup>54)</sup>。

7の数字が頻出する白雪姫の話は、エンゲルラント、地獄であり、異教とされたディアナを崇拜する人々の国であるとする、父親の娘に対する近親姦<sup>55)</sup>の可能性が浮上してくる。なぜなら近親婚の禁止が一般的になるのは16世紀以降のことであり、それ以前の社会ではさほど珍しいことではなかったからだ<sup>56)</sup>。そのことを月や豊穡のシンボルである鏡の、「白雪姫のほうが、后より美しい（豊穡だ）」という言葉で察知した母親が、娘を森に追いやったのであろう。母親である后は紐や櫛や林檎を持参して娘の貞操観や成熟度を確認しに行ったのではないだろうか。本気で殺すつもりなら殺せたものを、魔術で蘇る種類の毒を林檎に入れたのは、娘を父王から隔離するのが目的だったからではないのか。苦勞して森の中に仮死状態で安置した娘を、実の父が見つけ出し、張り縄の魔術で境界を作って魔術（林檎の毒）を遮断し、娘を蘇えらせたとき、后はさぞ落胆したことだろう。物語はそれについて述べていないが、おそらく娘は蘇らせてくれた父王と結婚したのであろう。突然、とってつけたように「白雪姫はある美しい王子と結婚した」という文章が挿入されるが、どこの国の王子かは不明のままである。

グリム童話には初稿や初版には娘が実の父親である王と結婚する話が存在する。KHM65「千枚皮」がそうである。初版では実父と結婚するが、決定版では改変されてどこかの王子と結婚するとされている。「白雪姫」もその種の話だったのではないだろうか。

男子を出産せず娘を1人しか産んでいない后は、王家の正妻としての地位が危ういものであると自覚していたのだろう。自分の美（豊穡）について鏡に聞くのはそのような不安を抱えていたからであろう。豊穡と愛のシンボルである鏡は「ギリシアでは豊穡をもたらすお守り」であった<sup>57)</sup>。またドイツではザクセンシュピーゲルやシュヴァーベンシュピーゲルという使用法から、鏡（Spiegel）は法律を意味する語でもあった。

初稿に紹介されている異型では伯爵は夫人と馬車で出かけているときに、雪のように白く、血のように赤く、カラスのように黒い女の子が欲しいという。するとそのような容貌の少女、白雪



姫に出会う。伯爵は少女を馬車の中に入れるが、夫人は面白くない。そこで夫人は手袋を落として、少女に取ってくるよう命じる。少女が馬車から降りるや否や、夫人は全速力で馬車を出発させる<sup>58)</sup>。

この場合、白雪姫は王の娘ではなく、道端で見初めた少女である。王がこの少女を愛人にしようとしたことは、后が手袋を投げたことで判明する。敵に「戦闘開始を告げる印として手袋を投げる風習は、中世全期間を通じて行われていた」からだ<sup>59)</sup>。初稿に付加された異型では王の浮気が示唆され、初稿に採用された話では王の近親姦が疑われる。いずれにしろこのメルヒェンにおける悪人は実母である后ではない。豊かな出産能力を保持しない彼女は悪的首謀者ではなく、むしろ被害者といえる。真の悪人は後に受胎能力の衰えを指摘し、後の地位や命が危険に晒されていることを認識させ、娘への近親姦を察知させた権力者である父王であろう。

王家の后にとって、出産能力（美しさ）は何よりも大切であり、それが不在の場合は命の危険に晒されるのは、英国のヘンリー 8 世の例からも明らかである<sup>60)</sup>。この話はおそらく男子を産まない女性を「悪」とみなす、王家や中世社会のジェンダー観が生み出した物語であろう。嫉妬に狂う後の話ではなく、女の豊穣さを失いつつある后を追い詰めた王の話である、と解釈することができる。

白雪姫の後の行動は、父娘近親姦を阻止しようとしたものである。動機は、おそらく娘に対する愛情というより、自己保身であろう。なぜなら、細やかな愛情で結び付いた親子関係は近代家族の創出物であるからである。西洋中世の親子関係は後継者の出産を巡って厳しい緊張関係に晒されていた。後継者創出は夫婦愛や親子愛よりも重視すべき最優先課題であったからだ。つまり、夫婦愛や親子愛も不変のものではなく、時代によって社会によって変わるものなのである。

## 注

- 1) メルヒェン (Märchen) というドイツ語は、日本語に直すと「昔話」に相当する。童話という訳語は厳密には不適切だが、日本語では『グリム童話集』という訳語が定着しているのでここでも使用する。しかし、より正確に表現したいときには、「メルヒェン」と表示することにする。
- 2) Reinhold Steig: *Achim von Arnim und Jacob und Wilhelm Grimm*. 2. Aufl. Bern 1970 (1. Aufl 1894), S. 89.
- 3) Heiliges Römisches Reich、962-1806 年、中世に現在のドイツ、オーストリア、チェコ、イタリア北部を中心に存在していた政体
- 4) ウォルト・ディズニー著、立原えりか訳『ディズニー名作ライブラリー I』講談社、1994 年、6-16 頁。
- 5) Brüder Grimm: *Kinder- und Haumärchen*. Stuttgart 1980, Bd. 1, S. 269-278.
- 6) 神田由布子訳『ディズニープリンセス 6 姫の夢物語』沙文社、89-102 頁。
- 7) Ingrid Ahrendt-Schulte: *Weise Frauen - böse Weiber*. Freiburg 1994, S.83.
- 8) Ingeborg Weber-Kellermann: *Die deutsche Familie*. Frankfurt/M. 1974. S. 20-21.
- 9) Brüder Grimm, a.a.O., S. 271.
- 10) Jacob Grimm / Wilhelm Grimm: *Deutsches Wörterbuch*, Leipzig 1877, Bd. 10, S 890.

- 11) 長島伸一『世紀末までの大英帝国』法政大学出版会、1987年、248-249頁。
- 12) Ingeborg Weber-Kellermann, a.a.O., S. 106-107.
- 13) Ebd. S. 107-108
- 14) Wilhelm Grimm: *Einleitung. Über das Wesen der Märchen. In: Kleinere Schriften.* Hildesheim. 1922 (1. Aufl. 1881). Bd. 1, S. 340.
- 15) ハイน์リッヒ・ミッターイス著 世良晃志郎訳『ドイツ法制史概説』創文社、1954年、58-61頁。
- 16) 同上、45-46頁。
- 17) Heinz Rölleke: *Die Älteste Märchensammlung der Brüder Grimm.* Cologny-Genève 1975, S. 380-381.
- 18) Ebd. S. 380-381.
- 19) Engelland については3.4)の項(35頁)で詳述している。
- 20) Heinz Rölleke, a.a.O., S. 244-246.
- 21) Ebd. S. 245-247.
- 22) Lutz Röhrich: *Märchen und Wirklichkeit.* Wiesbaden 1974, S. 132.
- 23) 上野千鶴子『発情装置』筑摩書房 1998年 99頁。
- 24) Ingeborg Weber-Kellermann, a.a.O., S. 20-21.
- 25) 前野みち子『恋愛結婚の成立』名古屋大学出版会 2006年 332-333頁。
- 26) ジャック・ル・コブ著 桐村泰次訳『中世西欧文明』論創社 2007年 532頁。
- 27) ( )の数字は同じものを除いた回数。
- 28) Wilhelm Grimm: *Einleitung.* a.a.O., Bd. 1, S. 349.
- 29) 拙論「グリム童話における7の数字—不吉な7の出現を巡って」、阪神ドイツ文学会『ドイツ文学論攷』53号所収、2011年 7-29頁。
- 30) Irene Hardach-Pinke / Gerd Hardach (Hg.): *Deutsche Kindheiten. Autobiographische Zeugnisse 1700-1900.* Kronberg / Ts, 1978, S. 2.
- 31) Hans Hattenhauer (Hs.): *Allgemeines Landrecht für die Preußischen Staaten von 1794.* Frankfurt / M., 1970, S. 55 (1. Teil, 1. Titel, §§ 25).
- 32) Franz Carl Endres / Annemarie Schimmel: *Das Mysterium der Zahl. Zahlensymbolik im Kulturvergleich.* München, 2005, S. 143f.
- 33) Rosemary Ellen Guiley: *The Encyclopedia of Witches and Witchcraft.* New York, 1989, S. 251.
- 34) Ebd. S. 251.
- 35) Franz Carl Endres / Annemarie Schimmel, a.a.O., S. 143f.
- 36) *dtv-Lexikon—Ein Konversationslexikon.* München, 1974,, Bd. 5, S. 105.
- 37) Jacob Grimm / Wilhelm Grimm: *Deutsches Wörterbuch.* Leipzig 1862, Bd. 3, S. 474f.
- 38) Hildegard Schmölzer: *Phänomen Hexe—Wahn und Wirklichkeit im Laufe der Jahrhunderte.* Wien 1986. S.15-16.
- 39) Fritz Byloff: *Hexenglaube und Hexenverfolgung in den österreichischen Alpenländern.* Berlin und Leipzig 1917, S.63.
- 40) Ebd. S. 63 Man wird hier nicht, wie Soldan-Heppe 1534, an Großbritannien denken dürfen, sondern an das Land des Engels. (1534年にゾルダン ヘッペが述べているように、ここでは大英帝国



ではなく、天使の国を意図すると考えてよい。)

- 41) Ad de Vries: *Dictionary of Symbols and Imagery*. Amsterdam, London, 1974, S. 323.
- 42) Hildegard Schmölder, a.a.O., S.17.
- 43) Ebd. S. 17.
- 44) Heinz Rölleke, a.a.O., S. 250.
- 45) Heinz Rölleke, a.a.O., S. 257-259.
- 46) アーノルド・ヴァン・ジェネップ著、秋山さと子他訳『通過儀礼』 新思索社、1998年、87頁。
- 47) 同上、84頁。
- 48) ハンス・フリードリヒ・ローゼンフェルト／ヘルムート・ローゼンフェルト著 鎌野多美子訳『中世後期のドイツ文化・1250年から1500年まで』三修社1999年 149頁。
- 49) 同上、149頁。
- 50) アーノルド・ヴァン・ジェネップ著、前掲書87頁。
- 51) Hildegard Schmölder: a.a.O., S. 15.
- 52) Laura Ward / Will Steeds: *Demons. Visions of Evil in Art*. London, 2007, S. 8.
- 53) Ebd. S. 225.
- 54) *Das Neue Testament*. Übers. v. Hans Bruns. Giessen, 1960, S. 694.
- 55) 「近親相姦」は両者の合意に基づいた行為を意味する言葉なので、一方的に犯されるインセストは「近親姦」と表現する。石川義之著『社会学とその周辺』大学教育出版、2002年、218頁。
- 56) クロード・レヴィー・ストロース著、馬淵東一他訳『親族の基本構造 上巻』番町書房1977年、72頁。
- 57) Ad de Vries, a.a.O., S. 323.
- 58) Heinz Rölleke, a.a.O., S. 250, 252.
- 59) Jakob Grimm: *Deutsche Rechtsalterthümer*, Göttingen 1828, S. 154.
- 60) 1人目キャサリン・オブ・アラゴンは結婚無効(毒殺説あり)、2人目アン・ブーリンは処刑、3人目ジェーン・シーモアは王子出産後死亡、4人目アン・オブ・クレーブズは離婚、5人目キャサリン・ハワードは処刑、6人目キャサリン・パーは最後まで添いとげ王の死をみとる。ヘンリー8世が6人も妻を取り替えたのは、妻が男子を産まなかったからである。その証拠に王は王子出産後死亡したジェーン・シーモアを終生愛し、死後は彼女とともに埋葬されている。渡辺みどり『英国王室物語 ヘンリー八世と六人の妃』講談社、1994年、21-217頁。